

ハイブリッドロケットと有翼飛行体

打ち上げ、回収実験成功

完全再使用システムへ 各種データを蓄積

大樹航空公園
北大・道工大

【大樹】北大と道工大の研究グループは13日、大樹町の多目的航空公園付近の原野で、ハイブリッドロケット2号機と、スペースシャトル型の有翼飛行体(ひしょう)体を、それぞれ打ち上げた。ともにこれまでの機体を一部改良して使用。ロケットはパラシュートによる回収、飛行体は自力で上昇に成功させ、各種データを蓄積した。(浅井文人)



計測装置を搭載して打ち上げられるハイブリッドロケット(山下僚撮影)

12日には道工大のメンバーが同公園内で、事前に組み込んだプログラム通りにラジコン機を自律飛行させることに成功した。

いずれもハイブリッドロケットを打ち上げ、同機体を地上の指定場所まで誘導し、無事に回収できる技術を確認し、低価格で安全な「完全再使用打ち上げシステム」を開発することが目的。20

01年、02年に続く実施となった。今後は、それぞれの実験の成果を駆使し、最終的には上空から滑空する間に数分間の微小重力環境を創造したり、小型人工衛星を打ち上げられる技術を確認し、実用化を目指す。

13日は両大学の学部生、院生、指導教授ら約25人が参加。午前には、回収システムを構築する目的で、有翼飛行体の打ち上げ実験を実施した。打ち上げた機体を目標地点まで正確に誘導し、飛行機のように着陸させて再使用できる技術の確立は、洋上や砂漠、海外に比べて回収コストを大幅に軽減できるほか、地上で暮らす人々の安全確保に不可欠となる。

北大大学院の永田晴紀助教授は「3つの実験はすべて予定通り。今後はハイブリッドロケットの機体を徐々に大型化し、5年以内に推力1トンを高度数百メートル打ち上げることを目標としたい」と話していた。

前回(01年11月)の実験で用いた機体は無動力タイプで、ラジコン飛行機の背に載せ、上空から分離、滑空させた。今回は機体自体に固体燃料を搭載し、発射台から自力で発射させ、高度約90メートルまで安定した姿勢で上昇



発行所
十勝毎日新聞社

©十勝毎日新聞社 2003

〒080-8688

帯広市東1条南8丁目
TEL(代表)0155-22-2121

編集局 0155-22-2121
広告局 0155-23-2323
販売局 0155-24-2222
事業局 0155-22-7555
総務局 0155-24-2299

広尾支局 01558-2-4111
池田支局 01557-2-2367
本別支局 01562-2-2618
新得支局 01566-4-5524
札幌支社 011-261-2161
東京支社 03-3544-1365